

---

# 天使と悪魔

せおりめ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使と悪魔

### 【Nコード】

N4306BA

### 【作者名】

せおりめ

### 【あらすじ】

地上の天使と悪魔の攻防戦。狐と狸の化かし合い。

## 天使

闇に生きる者の時間、夜である。

ビビは早春の冷たい空気と共に薄光を纏い、純白の羽を広げてフワリと降り立った。

勉強机に向かっていた子供が、顔だけを向けた驚愕の眼差しで彼を見つめ、持っていたシャーペンをポトリとノートに落とす。呆然と呟いた。

「天使が……窓から……？」

ビビは自分がその表情を浮かべた時の効果を存分に承知した上で、愛らしく微笑んで見せる。この笑顔を前にすると老若男女の区別なく、人間は誰もが彼に陶醉する。ふと、腰の横から黒い三角矢印がプラプラ揺れていることに気づいた。ビビは表情に出さないまま内心で舌打ちし、慌ててそれを背後に隠す。素知らぬ風情で確認すると、見開いた子供の目はビビの美しい顔貌に固定されたままだ。

よし、大丈夫だ。

ふん、間抜けめ、とビビは目前の子供だけではなく、愚かな人類全体を馬鹿にした。

そんな考えはおくびにも出さず、彼は珊瑚の唇から天上の調べのような声を紡ぐ。

「僕はビビ。ある偉大な存在から、人を幸せにするようにと仰せつかってきたんだ。君の願い事を一つだけ叶えさせて？」

特別サービスで小首も傾げてみせた。

「願い事？」と寝惚けたような面持ちで、子供がオウム返しに言う。

「そう、願い事」

理解の遅いガキめ、一度言っただけで理解できないのか！ と胸中で罵りながら、ビビも穏やかに繰り返した。

「……」

ここで子供が初めて彼から視線を外し、机に向き直る。両肘を突いて指同士を組むと、考え込むように額をその手に埋めた。

さつさとしろ、と怒鳴りつけたい気分になったが、ここで焦ってはいけないと分かっている。大抵の人間はまずこうして、自分に合った方法で信じられない状況を理解するよう務める。中にはパニックを起こして泥棒だ、強盗だと騒ぎ立てる煩わしい者もいるのだ。それを考えると、この子供は随分落ち着いている方だといえる。

待つのも仕事の内だ、とビビは横柄に見えないよう、手を身体の前で握り合わせて行儀良く佇んだ。

それからさほど待たなかったように思う。子供が決心したように顔を上げ、椅子をクルリと回転させて、身体ごと彼に向き直った。遠慮がちに口を開く。

「一つ質問があるんですけど……いいですか？」

子供が立ち上がり、偉そうに椅子に腰かけたままだったのが不満だったものの、ビビは愛想良く答えた。

「なんなりと」

こっちに椅子譲れよ！ 最近のガキは畏敬の念つてものが薄れている、と嘆かわしく思いながら。

「どうして僕の所へ来てくれたんですか？」

「こう尋ねてくる輩は多い。そんなもの、適当に決まっている。だが、彼はこう答えるようにしている。」

「君が特別いい子だからだよ。考えてもごらん、人生は、必ずしも善人が報われるとは限らない。心がけの良い者ほど虐げられ、悪の道突き進む者ほど大きく立派な家を建てる。それは世の中の流れで、誰にも止められない。例え神様だろうとね。でも、それではあまりにも不条理で理不尽だ。この現状に、天の住人は皆嘆いている。」

「だから！」

「ここでビビは効果を高めるように、一度言葉を切った。狙いどおり、子供は彼の言葉を一言も聞き漏らさぬという熱心さで耳をそばだてている。」

「全く、簡単なものだ。」

「救済措置を取ることにしたのさ。それが例え、広大な砂漠に如雨露で水やりをするような行為でも、一人でも多くの人間を手助けしたい、とね。ただし、だれでもいいというわけではないんだ」

「ビビは期待と不安を煽るために子供をじつと見つめた。もしかして、僕は選ばれたのか、でも機嫌を損ねたら帰られてしまうかもしれない。狭間で揺れ動く気持ちを表すかのように、子供の目が落ち着きなくさ迷う。もう、子供はまな板の上の鯉も同然だった。」

「善人は世の中に溢れかえっている。でもただの善人じゃ駄目なんだ。その中でも特に世の中に貢献した、特別な人間でない」と

「ここでたっぷりと間を置き、気を持たせる。そして両手を広げ、

廠かに発表した。

「それが君なんだ！」

ビビはこの言葉に、子供が感激する様子を当然のように思い描いていた。しかし予想に反し、子供は納得いかない、というように眉根を寄せて顎に指を当てる。

「でも、僕はそれほど大層な良い行いをした覚えはないんですけど……。せいぜい、児童会の活動で道端の空き缶拾いをしたとか、みんなが嫌がる学級委員長をかって出たとかそういうたぐらいで」「それが大きいんだよ！」

それ以上は言わずまじ、とビビは子供の言葉を遮った。子供が勢い込む彼に驚き、僅かに顎を引く。

大方の人間は褒められると普段の行いを忘れる。そして甘言に乗って願い事をべらべら喋ってくれるもののだが、と彼は面倒に思った。

これだから子供というのは、妙なところに正直で困る。そう内心で難癖をつけながらも、自慢の笑顔を振る舞う。

「規模の大小は関係ないんだ。道端の空き缶拾い？ 空き缶は危険だよ。車のタイヤに弾かれ、それが誰かに当たって怪我をさせてしまう危険性もあれば、誤って踏んづけてしまい、転ぶ場合もある。天下の公道を綺麗にしているんだ。続けると、誰もが安心して気持ちよく通れる道路が出来上がるじゃないか。学級委員長？ クラスを纏める大事な役目だ。尻込みするクラスメートたちのために、自らの気持ちを押し込めて立候補するなんて、君はなんてよくできたいい子なんだろう！ そういった小さな一つ一つの積み重ねが、こうして奇跡を呼び寄せたんだ。君にはそれを受け取る立派な資格が

ある！」

一気に捲し立てられ、子供は暫し呆気にとられているようだった。しかしやがてはその頬も緩み、満面の笑顔で「ありがとうございませす！」と声を張り上げる。そのいささか大き過ぎる音量に、ビビは焦ってシートと静かにするようジェスチャーで指示する。親でも入ってきたら面倒だ。

子供が眉尻を下げて口を片手で覆った後、すみません、というように軽く頭を下げた。

「理解してくれたようでよかった。じゃあ、早速願い事を聞かせてくれるかい？」

全然早速じゃないけどな。無駄な時間取らせやがって、とビビは喉元で毒突くが、顔面にはもちろん優美な笑みを貼りつけている。子供が「はい！」と元気よく返事した。しかし次の瞬間には顔を曇らせ、「あの……」と呟いた。ビビは地団駄を踏みたい気分をぐつと堪える。

「どうしたの？」

「もうちよつと訊きたいことがあるんですけど……」

いいですか？ と不安そうに上目遣いをする。

さっさと答えよ！

がなり声を慈愛の微笑み付きの「どうぞ」という言葉に置き換え、ビビは続きを促した。子供が恐縮したように口を開く。

「どんな願い事でもいいんですか？」

「いいよ、と言いたるところなんだけれど、条件は付く。まず、他人が傷ついたり、不利益を被るような願いは聞けない」

そう言うと、「さすがは天使、良心的なんですね」と子供が感心したように呟く。ただ単に、ナワバリの問題が絡むだけなのだが、それを親切に教える必要もない。

「それから、君自身に直接関する願い事だけだ。例えば、君を将来サッカー選手にしてあげることとはできるけれど、お父さんを社長にしてくださいというのは駄目。お父さんが社長になれば君の生活も豊かになるだろうけれど、そういう間接的なものでは後で不服を訴える人が現れるからね」

「不服？」

「そう。別に君がそういう人だというわけではないけれど、お父さんが社長になった後、何か不祥事を起こして失脚したとする」

「ここで子供が不吉なことを、と言いたげに眉をしかめたが、ビビは無視して続ける。

「そして借金を背負い、地を這うような生活に追い込まれる。そうなってから、思い出すわけだ。昔天使に願った内容を。自分は利益を見越して願ったのに、それが全然叶えられてないではないか、と」  
「なるほど、そういう事態を防ぐためなんですね」

子供は納得したように頷いた後、もう一つ、と人差し指を立てて付け加える。

「まだあるのかよ！」

目の前の子供を張り回したい気持ちになったが、ビビは忍の字で耐えた。

「僕があなたに願い事を叶えてもらったとして、何か見返りを要求されることはありませんか？」



この質問に、彼は今までで一番愛想のいい、とっておきの笑顔で応える。声も何段階か高くすることにした。

「どこかの悪魔じゃあるまいし、見返りなんて求めないよ。さつきも言った通り、これはある偉大な存在によるご褒美的な、言わば無料奉仕だ」

そうドラマで役者が演じるように大袈裟な素振りで言った後、ただ……とビビは憂いも濃くまつげを伏せた。こうすると、相手の同情心が天を突くほど高くなることを彼は知り尽くしている。

「お願いがあるんだ」

切なさを込めて子供を見つめた。

「どうしたの？」

子供が心配げな表情で問いかけてくる。ビビとしてはしめしめ。

「僕たちは、死んだ人間の魂を管理している。誰が誰を担当するか、それは神様が決めることなんだけれど、どうか僕を選んでくれないかな？ 君がこの先何十年後に死んでしまった後、僕に君の魂をお世話させてもらいたいんだ」

思いもかけない嘆願だったのだろう。子供がたまげたように目を丸くしている。そのままの表情で、声を押し出すように言った。

「でも、神様が決めるんだったら、僕の意志なんて関係ないんじゃない……」

「それが大丈夫なんだ。願いを叶える側と、叶えられた側には特別な絆が結ばれる。契約関係にある、と言い換えてもいいかな？ その場合は特例と見なされるんだ」

「つまり、ちゃんと願いを言っつて、叶えられないと契約は結ばれないってことですか？」

「そういうこと」

「僕に直接の利益がないと、叶えられたとはみなされない？」

「そのとおりだ。君は質問の内容を聞く限りでも頭がいいし、心優しい子供だ。顔立ちも整っているから、学校でも人気があるんだろっね。きつと、君の魂を管理したいと思う者は両手に余るほどいるだろっ」

ビビは自尊心をくすぐるように、ここぞとばかりに子供を褒めちぎった。

「でも、僕だつて君のことがとっても気に入った。だからどうか、僕を選んでくれないかな？」

そして瞳に星を抱き、懇願するように瞬きする。

子供が俯き、束の間肩を震わせた。そして素早く上げたその顔には、ビビに対する感謝の念が滲んでいた。

「ありがとう、ビビ。僕、そこまで望んでもらえるなんて感激だ。

僕の方こそ喜んでお世話になりたいと思うよ。他の誰でもない、あなたに！」

ビビは謝辞を述べる代わりに遠慮深く見える微笑みを作り、胸中で快哉を叫んだ。完全に彼のことを信用した証なのか、子供の言葉遣いがタメ口になっている。それについて立腹しながらも、寛大な気持ちで許してやった。なにしろ、これでこの子供の魂は手に入っ

たも同然なのだ。

「じゃあ、言ってみて」

後は願いを叶えるだけ、とばかりに優しい声音で催促する。  
子供が朗らかに口を開いた。

「うん、僕の願ひ事はね」

そう言いかけて子供が、あ……と何かを思い出したように言い定む。

いい加減にしろ！

ビビは周囲を灰燼に帰す勢いで暴れだしたくなつたがそれを脅威の自制心で抑え、「何？」と尋ねた。若干口の端が引きつり、声に苛つきが混じってしまったが、まあこの子供は気づかないだろう。子供は後ろめたそうに視線を下げ、椅子に座ったまま足をブラブラさせた。

「あのさ、実は、僕には大事な親友がいるんだ。ソイツ、普段からツイてない奴で、ハタから見ても本当に可哀想でさ。なんとかしてやりたくても子供の僕じゃなんにもできなくて、いつも悔しい思いをしてたんだ」

それで……と言葉を詰まらせ、子供が彼を上目遣いで見る。ビビはとてつもなく嫌な予感を覚えた。唾液を嚥下したのだろう、子供の喉が上下するのがチラリと見えた。

そして子供が意を決したように口を開く。

「ごめんね。僕だつてとつてもあなたに願いを叶えてもらいたいんだよ？ でも、親友には幸せになつてほしいんだ。お願いだよビビ、

僕じゃなくて、アイツの所へ行つてやつてくれないか？」

必死さの滲む声を最後まで聞いた後、ビビは目眩を覚えた。冗談ではない。そんな面倒なこと。

どう言いくるめようかと悩んだ彼はしかし、子供と目を合わせてから、その考えは放棄するしかない諦観を抱いた。堅い岩盤さえ貫きそうな視線。これは、腹を決めてしまった人間の目だ。決心を揺るがすには、相当な時間と根気と努力を要するだろう。

一応、イタチの最後っ屁的に足搔いてはみる。

「僕はどうしても君がいいんだけれど……」

気弱な声で言ってみた。しかし返ってくるのは、頂垂れてつむじを見せる子供の「ごめん……」という言葉だけだった。時折しゃくり上げ、それに合わせて子供の髪が揺れる。その様を見つめるビビの心を、色んな想いが渦巻いた。

このクソガキが！ さんざん手間かけさせた拳げ句がこれかよ！ 八つ裂きにしてやろうか！！

激しい感情が膨れあがり、隠し持った鋭い爪が飛び出そうになった。が、しかし、と思いつまる。

この子供が言う通りだとすると、『親友』とやらは普段から不遇な目に遭っているらしい。そういう人間、ましてや子供ならば、ビビの提案には飛びつくことだろう。

彼は視線をサツと室内に走らせた。最新のゲーム機、テレビ、オーディオ。本棚には何冊もの漫画が並んでいる。どうやらこの子供はかなり恵まれた環境にいるようだ。大抵の子供は、願い事を尋ねると玩具類を口に出す。溢れるほどの物質に囲まれている子供に持ちかけても、欲求は思い浮かばないものなのかもしれない。

チツ、これだから子供は、とビビは目前の子供を蔑視した。

下手に憂さ晴らしをするよりも、確実に手に入る魂を選ぶべきだ。

仕方がない。

そう心を決め、ビビは残念そうな、そして諦めたような見る者の罪悪感をあおる表情を意識して浮かべる。

「分かったよ。君の代わりに、誠心誠意、その子の願いを叶えさせてもらうよ」

彼がそう口にする、子供がパツと顔を上げた。涙の跡が微塵も見られない、太陽のように明るい面持ちだった。クソ、人の気も知らないで単純に喜びやがって、という眩きは、声に出さないよう気をつけておいた。

「ありがとう！ アイツ、きつと泣いて感激するよ」

ビビは腹立たしい気持ちを押し隠してその言葉を聞き流し、子供から『親友』の住所を書いたメモを受け取った。ビビには住所から目的地を割り出すことなど造作もない。

「あ、そうだ。アイツもいきなりビビが現れたら戸惑うと思うんだ。なんせ気が弱いから。僕も色々質問したし、君に何度も同じことを言わせるのは悪いから、予めこっちから説明しておくよ」

「そうだなあ……とこめかみを指先で叩き、子供が考える素振りをする。そして言った。」

「悪いんだけど、三十分後ぐらいに行ってやってくれないかな？ その間に電話しておくから」

いちいち面倒なことを言うガキだ。そう思ったが、確かにその方が手間は省ける。ビビは子供に満面の笑顔を向け、提案に乗ることにした。

「じゃあ、アイツを幸せにしてやってね」

子供が携帯を片手に機嫌良く手を振る。その無邪気ににこやかな顔に見送られ、ビビはくさくさする気分で部屋を後にした。

ビビは今、この地域で一番高いビルの天辺、その縁に腰掛けている。闇よりもなお深淵なコウモリの羽、漆黒の体躯、鋭く尖った耳大きく裂けた口、そして矢印のような尻尾。ビビは今、彼が本来持つている悪魔の姿に戻っていた。

彼の仕事は愚かな人間を墮落させ、魂を集めること。金の髪に純白の羽、美しい顔貌。聖画に出てくる天使の出で立ちで現れると、誰もがコロリと騙される。どう頑張っても尻尾だけは変化できないのが玉に瑕なのだ。しかしそれは背後に隠せば済むことだ。

高層ビルの頂上は風が強い。常に吹きつけてくる激しい風にも、しかし彼はビクともしなかった。

ビビは自分が天使だと詐称したことはないし、天からやってきたとも言っていない。契約を交わせば天国へ行けるとも約束してはいない。嘘は一つもついていないのだ。ただ、否定しないだけ。勘違いするほうが悪い。

ビビは地上を見下ろした。夜空を彩る星よりも明るい、無数の小さな灯りが輝いている。その光の数だけ、いや、それ以上に欲望が蠢いている。全く、人間の欲には果てがない。そのおかげで回収する魂に事欠かない彼は、笑いが止まらなかった。

そろそろ三十分が経つ頃だ。ビビは闇色の大きな羽をはためかせ、喧噪から遠く離れた夜空へと飛び立った。新月の中風を切りながらふと、あの子供の魂を手に入れられなかったのは残念だと思った。

まあしかし、すぐにも別の魂が飛び込んでくるのだ。

そう考え直し、ビビは次の目的地へと向かった。

## 悪魔

翌朝。県立西小学校五年二組。

学級委員長の悠馬は黒板上の時計を仰いだ。HR開始の二十分前。今日はこの時間までに集まるよう、昨晚の内に連絡を回しておいた。彼はクラス中央、柎の席まで行くと、机の上に腰かける。

「あれ、もうそんな時間？」

椅子に座っているこの席の主、柎が彼を見上げた。悠馬はうん、と返事をし、机の上にあったカンペンケースを手取る。

「注目ー！」

声を張り上げながら、カチャカチャと振り回す。柎が「芯、折れる！」とひつたくり、彼はゴメン、ゴメンと笑いながら謝った。

教室中のおしゃべりが止み、クラス中の視線が集まる。

悠馬は二十九人全員の顔を見渡すように首を巡らせた。若干一名が机に突っ伏して寝ていたが、アイツはとぼけたふりして結構周りがよく分かっている、と好きにさせることにした。口を開く。

「昨日の首尾を報告し合おう。まずは柎、どうだった？」

悠馬は『親友』に視線を戻し、尋ねる。柎が顔をしかめた。

「お前さ、アイツに俺のこと可哀想なヤツだって言っただろ？ 演技するの大変だったんだからな」

「どんな設定？」

「道を歩けば犬に吠えられ、転べばフンを掴む。大事な場面ではい

つもポカやらかして、遠足は休めと言われる皆から敬遠されてる雨男」

誰かが吹き出す音や、「何それ、カワイソー」といった声が次々と上がった。

それから？ と悠馬は促す。

「なるべく情けない声で不幸話を聞かせてたら、段々苛ついてくるのが分かって面白かったよ。頑張って抑えてみたいけど。それがさ、なんとか背中見ようとしても、絶対に隠しやがんの。正面しか向こうとしねーんだって。笑うっつの！」

クラス中が爆笑の渦に巻き込まれた。柊が得意げに続ける。

「最後に、好きな子の願い事を叶えてほしいつつつて帰ってもらった。怒り狂ってたのか、髪の毛逆立てて出てったよ」

怖え怖え、と彼は押し込みの訪問販売を撃退したかのように締めくくった。

「その好きな子って誰だー？」と誰かが茶化すように質問する。

「多分、私」

教室の端にいた麻央が、控え目に手を上げた。彼女は柊の幼馴染みで、クラスの中でも大人しい方だ。

「柊って麻央のことが好きだったんだ！」と麻央の隣に座る彩花が囁きたてる。

「んなわけねーだろ！」と怒った声で柊が即座に突っ込んだ。



周りも口々に冷やかしの声を上げる。だがそこには、親しい友達同士が事実を承知している上で、軽い冗談を言い合っている、という明るい雰囲気しか存在しない。それが分かっているから引っ込み思案の麻央も、困った顔をしつつも本気では嫌がらないし、からかう声もしつこくは続かなかった。

「私、怖かったしバレないか心配で心配で……。すぐ彩花ちゃんの所へ行ってもらっちゃった」

麻央がその時のことを思い出したかのように、身震いしながら胸に手を当てた。

それから、彩花、大地、拓海、という具合に一人一人が順番に武勇伝を報告していく。悠馬は一つ一つに相づちを打ちながら聞いた。ビビが去った後、彼はクラス全員に携帯メールを一斉送信した。

自称天使が現れたこと。その天使が持ちかけてくる取引と、条件。それから注意事項。次は柊の所へ向かうということを知らせ、ビビがそこから順番にクラス中の人間を巡るよう指示を出した。話を聞いている限り、皆うまくやってくれたようだった。

「最後は……航か」

悠馬は好奇心を刺激され、目を細める。一番前の、真ん中の席。

航は、「自分で作ったグライダーで世界一周してみたい」と口に出す変わり者だが、全国模試でいつも上位に名を連ねるほど頭がいい。彼がああ天使モドキにどう対処したのか興味があった。

机に突っ伏していた航が眠そうに身を起こし、赤くなったおでこをさする。脇に置いていた眼鏡をかけて、発言を開始した。

「僕の所に来た時は、あの 確かビビだったよね？ ビビはかなり疲れているみたいだった。もう夜中の二時を過ぎてたかな。髪も

羽も黒くなってたよ。僕は開口一番に、火星に住みたいって言ったんだ。本当に文明があったのか、自分で調べてみたかったんだよ。これが叶えられるんだったら、悪魔に魂を捧げたっていい。別に、火星を人の住める環境にしてほしいって言ったわけじゃないんだよ？ 僕だけが住めるようになればそれでよかったのに……。それなのにさ、あいつ、ただの三下だよ。それはできないって断ってきたんだ」

「確かに大したことなかったよね」と女子が笑い合う。「そうそう、こつち見下してる感じだったしさあ」「アイツに騙されるのって、よっぽど短絡的なニンゲンだよな〜」

航が肯定するようにならずれた眼鏡の位置を直し、立て板に水な不平不満を再開する。

「どうして駄目なの？ って問い詰めた。最初はビビも、地球を離れた魂は戻れなくなるだとか、常識の範囲内に収まる内容でないととか色々言い訳してた。でも最後には認めたまよ。要するに、アイツの力じゃそこまで大層な願いは叶えられないんだって。悠馬からメルが来た時、わくわくしてたんだ。沢山ある願い事を吟味してさ。それなのに、てんで低級だったんだもん。ガツカリだったよ」

ちよつと僕の身体を火星用に改造して、そこまで送り込んでくれるだけでよかったのに……とぶつぶつ不満を零している航に苦笑し、悠馬は「それで？」と促す。

「まあ他にも色々あるからさ、次々列挙してつたわけ。『自分の足で走って音速の壁を超えてみたい』とか『キリストの時代まで遡って、人柄を確かめてみたい』とか。知ってる？ キリストって、一般にイメージするストイックな人間じゃなくて、食べたり飲んだり

して騒ぐのが大好きな陽気な人だったって記録も残ってるんだって。ついでに実際の説法も聞いてみたかったし。そんなのも悉く却下されちゃったけどね」

「自分が悪魔被いされるとでも思ったんじゃない？」とどこかから声が上がリ、「言ってる！」と誰かが賛同した。ふざけた男子の一部がエクソシストの真似事をしている。被われた悪魔役が「ギャー」と大袈裟に叫んだ。

「結局、明け方までそんなやりとりを続けて、慌てて帰ってったよ。太陽に当たると灰になっちゃうのかも」

「あれ。航もしかして、寝てない？」

悠馬が驚いて問いかけると、うん、と答えが返ってくる。

「もう、眠くて眠くて」

航がふわああ、と盛大なあくびをした。

「分かった。ミキちゃんには言っというてやるから、保健室で寝てこいよ。念のため夏希がついていってやって」  
「ラジャ！」

保健委員の夏希が敬礼の真似をしながら答える。

「ありがとう」

航が言った。

他に眠い奴は？ と尋ねたが、最後の方は夜更かしの得意な者たちが対応したらしく、我慢できると口を揃えた。

「お疲れー」「お休み」と口々にかけられる声に短い返事をして、航は夏希に付き添われ、再度の大あくびをしながら教室を出ていった。

それからクラス中が、昨夜の愉快な体験の話題で持ちきりになった。柊が、「あの時アイツったらさあ」と楽しそうに話しかけてくる。またあんなことが起こらないかな、と片隅で考え、悠馬も笑いながら応じた。

五年二組担任、早川美紀が教室に辿り着いた時、中からは和やかな声が響いてきた。和気藹々とした雰囲気、廊下まで漂ってくる。このクラスは委員長の悠馬を中心に、一本の太い縄のように結束している。勉強面では苦手な分野を得意な者が教えることで補い合い、運動面でも鈍い子を馬鹿にしたり外したりすることもない。行事ごとにはクラス一丸となって取り組み、陰湿なイジメとは無縁だった。他のクラスの先生方にも、よく羨ましがられる。この小学校では、担任は二年間同じクラスを担当する。卒業まで美紀が受け持つ予定だった。それが本当に誇らしい。

満足感を噛み締め、彼女は横開きのドアを開け、教室へ入っていた。

「みんな、おはよう！」

「おはようございまーす。先生、航君が具合悪くて保健室に行きました」

「本当？　かなり悪そうだった？」

「大丈夫だと思えます。私が付き添ったんですけど、寝たらよくなるって言っていました」

「そう、よかった。先生もあとで様子を見にいつてくるね。では、出欠を取ります」

今日も、楽しく平和な一日が始まる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4306ba/>

---

天使と悪魔

2012年1月12日01時01分発行